法継受における主体性

菅原 寧格・郭 舜 （編）『公正な法をめぐる問い』
（信山社 2021） 合評会

椎名　智彦
(青森中央学院大学)

tomohiko-shiina@aomoricgu.ac.jp

Ⅰ．コメント対象

郭 舜（第2章）
「法のクレオールが胚胎する危険についての一考察」

尾崎 一郎（第3章）
「法のクレオール論再考 ― 2つの『外』について」

郭 薇（第4章）
「法のクレオールと専門性 ― 川島武宜の学説の伝播史からの示唆」

森元 拓（第11章）
「法におけるクレオールと穂積八束の国家論」

Ⅱ．法のクレオール：比較法学からみた特徴

1. 法の継受をめぐる法哲学

2. 主体性 (agency) への着目

⇒ 継受国 (受け手) 側
複層的

3. ミクロ的動態への着目

Ⅲ．コメント

1．郭舜論文

法の支配の軽視はクレオールの問題か？

Cf.) 〈生理〉と〈病理〉（応答pp.296-7）

⇒ ○：継受の〈法哲学〉 ×：継受〈そのもの〉

Cf.) 枢軸国法体制 (1920-40s) と内在道徳論 (1950-60s) の関係

Ⅲ．コメント

2．尾崎論文

継受国内の秩序統合に楽観的か？

法の継受に関する〈法哲学的〉一般理論

⇒「最終的成果は未完のもの」（応答p.295）

3．郭薇論文

〈学知の継受〉の複層性 ⇒ 知のクレオール

Ⅲ．コメント

4．森元論文

法知のクレオール：歴史法学と祖先教

⇒　理論的課題・発展性の指摘 (状況 (y) か (z) か)

Ⅳ．結びに代えて：受け手の主体性への着目

通底：〈法と開発〉批判 (Trubek)・垂直的法多元主義

⇒　西洋近代法一元主義批判・本邦比較法学の視点

参考文献

伊藤正己（編）『外国法と日本法：岩波講座現代法14 』(1966)

長谷川晃（編著）『法のクレオール序説：異法融合の秩序学』(2012)

菅原寧格・郭舜（編）『公正な法をめぐる問い』(2021)

LON L. FULLER, THE LAW IN QUEST OF ITSELF (Lawbook Exchange edn. 1999)(1966)

LON L. FULLER, THE MORALITY OF LAW (rev. ed. 1969)

KRISTEN RUNDLE, FORMS LIBERATE: RECLAIMING THE JURISPRUDENCE OF LON L. FULLER (2012)

MATHIAS SIEMS, COMPARATIVE LAW (2nd ed. 2018)